

世界の肥料需給見通し

— アメリカの農業観測から —

農林水産大臣官房調査課

田 村 修 一

アメリカ農務省は58年11月に「1984年農業観測」を公表した。以下はその中の、世界の肥料需給見通しの主な内容を取りまとめたものである。

(概 要)

世界の肥料産業は、今だかつてないほどの景気後退により、大きな影響を受けている。肥料需要は1980年以来停滞を続け、今後も数年間需給は緩和基調が続くとみられるが、世界経済が回復するにつれ、肥料需要は次第に増加するとみられる。

世界全体の総肥料需要は、1982/83年度の低迷した状態から、今後10年以上にわたって、年率で平均約4%の増加を示すとみられ、発展途上国では年率5.7%、先進国では同3.2%、そして中央計画経済国(東欧、中国等)では、同3.7%それぞれ増加するとみられている。

今後10年間の肥料需給を見通すことには、困難な面が多い。肥料産業は、1960年から1980年にかけてすさまじい成長を遂げてきた。すなわち、消費と生産はこの間、280万トンから1,150万トンへと4倍以上の増加を示したが、その後、ここ3年間、世界的に肥料産業はかつてないほどの最悪の危機に見舞われている。

肥料業界が過去の傾向に基づいて、需要に見合うための合理的な生産を計画していた間に、需要の増加率は突然低下した。この結果、肥料産業は窒素、りん酸、カリの3成分すべてについて、かなり過剰な生産設備を保有することとなり、肥料の価格は極めて低水準で推移している。

世界的な景気停滞は、アメリカの高金利ともあいまって、農業にも深刻な影響を及ぼしている。主要肥料需要

国である北アメリカ、西欧等の先進国では、農家所得の急激な減少を反映して、肥料の購入量が減少しており、また、多くの発展途上国においては、ドル高が肥料原材料の輸入を抑制している。

このように、肥料需要が停滞しているものの、世界の農産物生産は総じてみれば、豊作となっており、農産物価格もまた低迷した状態が続いてきた。

肥料需要はここ数か月、ある程度の回復の徴候がみられ、特にアメリカにおいては、1983年産作物の不作による農産物価格の上昇から、回復傾向がみられる。しかし、発展途上国では、国際収支の引き続き悪化から、国内需要を満たすだけの肥料輸入が行われず、このため、世界全体の肥料需要の回復は遅れると予想される。

しかしながら、増加を続ける世界の人々に食料を供給し続けるとすれば、肥料産業の長期的な将来には確かなものがある。

(窒素肥料の将来見通し)

表1で示されているように、今後数年間、窒素の供給は需要を満たして余りあることは明らかであろう。1983/84年度の世界の窒素消費量は増加すると見込まれ、1987/88年度まで平均して年率4%弱程度の増加が見込まれる。その後、1992/93年度までの5年間には、需要は同平均約3.7%で伸びると見通され、この増加の大部分は発展途上国での需要増大によるものとみられる。

発展途上国における1982/83~1992/93年度の10年間の需要の増加率は、年率約5.6%と見込まれるが、先進国では1982/83年度の低迷した水準に比べても、同約3.5%程度にとどまるとみられる。また、中央計画経済

表1 世界窒素需給 (単位: N換算100万トン)

年 項目	1982/83年度	1983/84	1984/85	1985/86	1986/87	1987/88	1992/93
供給可能量	62.4	67.5	70.7	74.8	74.8	75.7	—
需 要	61.4	63.7	67.0	71.8	72.8	74.2	89.1
収 支	1.0	3.8	3.7	3.0	2.0	1.5	—

国は、中国の増加率が低水準で推移するとみられることから、全体では同約3.0%の増加と予測される。

一方、供給事情をみると、先進国においては、カナダのいくつかの新設工場を除き、新たに生産を開始することはないとみられる。将来の天然ガス価格の不安定性、国際的な低価格競争、そして供給過剰を反映して、多くの工場が遊休化していることから、短期的には、新規生産のための投資は行われないうであろう。

特にアメリカにおいては、既にアンモニアの純輸入国になっており、今後数年間は、ますます輸入窒素の依存度が高まっていくとみられる。西欧もまた、国内の天然ガス価格が上昇するとみられることから、需要を満たすために、ますます輸入窒素、特に東欧からの輸入に依存するようになると見込まれる。

(りん酸肥料の将来見通し)

表2に示されているように、りん酸肥料産業の将来見通しは不幸にもかなり厳しいものとなっており、需要はPIK計画や他のマイナス要因から回復した後、1987/88年度まで、年率平均約4%の増加が見込まれるが、供給過剰は今後年間が続くであろうと予想される。

表2 世界のりん酸塩需給 (単位: P₂O₅換算100万トン)

項目 \ 年	1982/83年度	1983/84	1984/85	1985/86	1986/87	1987/88	1992/93
供給可能量	35.7	37.2	38.2	39.0	39.9	41.0	—
需 要	30.9	32.5	34.1	35.5	36.8	38.2	45.6
収 支	4.8	4.7	4.1	3.5	3.1	2.8	—

発展途上国は最も将来有望な市場であり、需要は今後10年間は年率約6%の増加を示すと見込まれる。また、中央計画経済国は同3%の増加が予想される。先進国での需要は、1982/83年度以降の5年間は、現在の低水準に比べ同約4%の増加となろうが、1987/88年度から1992/93年度の5年間では、同約2%増と伸びは鈍化するとみられる。

需給が再び均衡するには、約6年が必要とみられて

いるが、実際には1年か2年で到達すると見込まれる。これは老朽化した工場や非効率な工場が、貿易構造の変化に影響されて、閉鎖されるとみられるためであり、特にヨーロッパや日本でこの傾向が強い。

(カリ肥料の将来見通し)

世界の苛性カリの消費量は、今後10年間に年率平均3.9%の増加を示すと見通される。地域別にみると、先進国は年率約3%、発展途上国は5.6%、中央計画経済国は4.2%それぞれ増加すると見込まれる。

苛性カリの供給を予測することは、他の2大成分の予測に比べれば、かなり容易である。苛性カリの主要な在庫は2~3の国や地域に限られており、将来の発展・変化の大部分もこれらの地域で起こるとみられるからである。

今後の大きな変化は、カナダとソ連で発生するとみられる。カナダでは、予想以上の需要の減少に伴い、新規生産計画のうちの一部が、延期されている。しかしカナダの供給量は1982/83年度の約800万トンから1987/88年度には、980万トンへ増加すると見込まれている。

現在、ソ連は世界最大の苛性カリ生産国であり、1982

/83年度の供給能力は約860万トンとなっている。さらにソ連は、国内の需要増加を満たし、輸出を拡大するために、1987/88年度までにその生産能力をほぼ1,100万トンに拡大するという大胆な計画を持っている。

この計画は、カナダの拡張計画の縮小分を上回っているが、その成功の可否の多くは、ソ連が過去において苛性カリ産業を停滞させてきた生産の遅滞と低操業効率を克服できるかどうかにかかっている。

表3 世界の苛性カリ需給 (単位: K₂O換算100万トン)

項目 \ 年	1982/83年度	1983/84	1984/85	1985/86	1986/87	1987/88	1992/93
供給可能量	26.8	27.0	27.9	29.1	30.5	31.0	—
需 要	23.8	25.1	26.3	27.6	28.6	29.7	34.8
収 支	3.0	1.9	1.6	1.5	1.9	1.3	—